

氏 名	平井 清子 (HIRAI SEIKO)
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	外 博 甲 第 2 号
学位授与の日付	2022年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	戦後台湾英語教育の実証的研究 —高校英語教科書にみる「文学性」と「政治・社会性」—

論文審査委員	主 査 教 授	山崎 直也
	副 査 教 授	江原 裕美
	副 査 教 授	大野 雅子
	副 査 教 授	塩谷 英一郎
	副 査	広島大学外国語教育研究センター 名誉教授 田中 正道

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、戦後台湾の英語教育の特徴がいかに形成され変容してきたのか、その要因を実証的に明らかにしようとするものである。具体的には、日本の「学習指導要領」に相当する「高級中学課程標準」及び「普通高級中学課程綱要」と各時期の「課程標準」「課程綱要」に準拠する英語教科書の量的・質的分析を軸に、実態調査（授業観察と教員への聞き取り、質問紙調査）を加えて立体的に考察している。

本稿は、序章と終章を含む全 8 章で構成され、巻末には資料編として、各時期の「課程標準」「課程綱要」の「目的」と「教材の綱要」の日本語訳、各時期の教科書の写真（表紙と論証の上で重要な本文）と「編集大意」の日本語訳、実態調査及び質問紙調査の報告が収録されている。本文 233 頁、資料編 54 頁、計 287 頁の労作である。

各章の内容は、概ね以下の通り。

序章 問題の所在と研究方法

第 1 章 戦後台湾の英語教育の歴史

第 2 章 各時期の「課程標準」「課程綱要」の分析

第 3 章 各時期の教科書の題材内容の量的・質的分析

第 4 章 1962 年改訂「高級中学課程標準」準拠の教科書『英氏高中英語』とその編者・英千里の研究

第 5 章 戦後台湾の英語教育の文学重視志向に関する量的・質的分析

第 6 章 台湾の民主化と英語教科書が扱う政治・社会的題材の変化に関する考察

終章 まとめと今後の課題

## 論文審査の結果の要旨

2022年2月15日の午後1時より平井清子氏の博士学位論文の審査、同日2時より口述試験が行われた。5名の審査委員のうち田中正道委員（広島大学外国語教育研究センター名誉教授）が書面での参加となり、所見、質問、可否の判定からなる「学位論文審査報告」が1月23日付で提出された。

「本論文の著者は博士（課程）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる」という田中委員の報告書面を踏まえ、山崎直也委員（主査）、江原裕美委員、大野雅子委員、塩谷英一郎委員の4名で論文審査を行った。「緻密かつ入念な実証研究であり、膨大な量の時間と労力をかけた労作」（大野委員）、「学際的な地域研究と英語教育を融合した点、教科書の分析に加え、授業観察、聞き取り調査を取り入れた点が評価できる」（江原委員）、「対象とする時代の長さから、各時期の掘り下げが足りない部分はあるが、量と議論の範囲の広さは博士論文たるに値する」（塩谷委員）との意見が各委員より提出され、全員一致で博士学位を授与するに十分な水準を備えた論文であることが確認された。

続いて行われた口述試験では、各委員から以下のような質問が寄せられた。

- ・言語転移、バイリンガリズムの研究から台湾の英語教育に関心が転じた直接的なきっかけは何か。
- ・台湾の英語教育で文学が常に重視される決定的な要因は何か。
- ・言語間の不平等（p.36）とはいかなる意味か。
- ・ある国の国民の英語力を考える場合、高校段階の英語教育のみを切り出して考えることはできず、小・中学校段階の英語教育の量と質、英語教育に対する家庭の投資に左右される部分があるのではないか。
- ・高校の英語教科書で取り上げられる文学作品について明確な基準は存在するか。
- ・台湾の高校生が英語でアウトプットを行うことは、実際のところどの程度可能であるのか。
- ・論文の中で強調される「論理的思考力」の含意は何か。単なる「思考力」とどのように異なるのか。
- ・台湾における民主化と教育の関係はいかなるものであったのか。
- ・今後、研究をどのような方向に発展させる考えがあるのか。

台湾研究（山崎委員）、比較教育学（江原委員）、比較文学（大野委員）、英語学（塩谷委員）、英語教育学（田中委員）と、研究上の専門を異にし、また英語、スペイン語、中国語などの言語の教員でもある各委員からの質問に対して、平井氏は真摯に回答を行い、約2時間にわたり、学術的に意義のある対話がなされた。一部の質問については、平井氏の当初の回答に至らない点があったが、平井氏と審査委員の間で議論を深めることにより、より深い理解に到達することができた。

提出された博士学位請求論文の質と量、また口述試験における質疑応答から、本審査委員会は平井氏が当該研究テーマについて確かな学術的専門性を有していることを認め、全会一致で博士の学位を授与するに相応しい研究であると判断した。

口述試験の際、今後の研究の展開として、平井氏からは、戦後台湾の英語教育者の人物誌的研究、英語教育の日台関係史という方向性が提示された。本論文は2000年代半ば以来の平井氏の台湾英語教科書研究の集大成であり、同時に新たな研究の土台となるものである。今後の平井氏の研究のさらなる発展に期待したい。